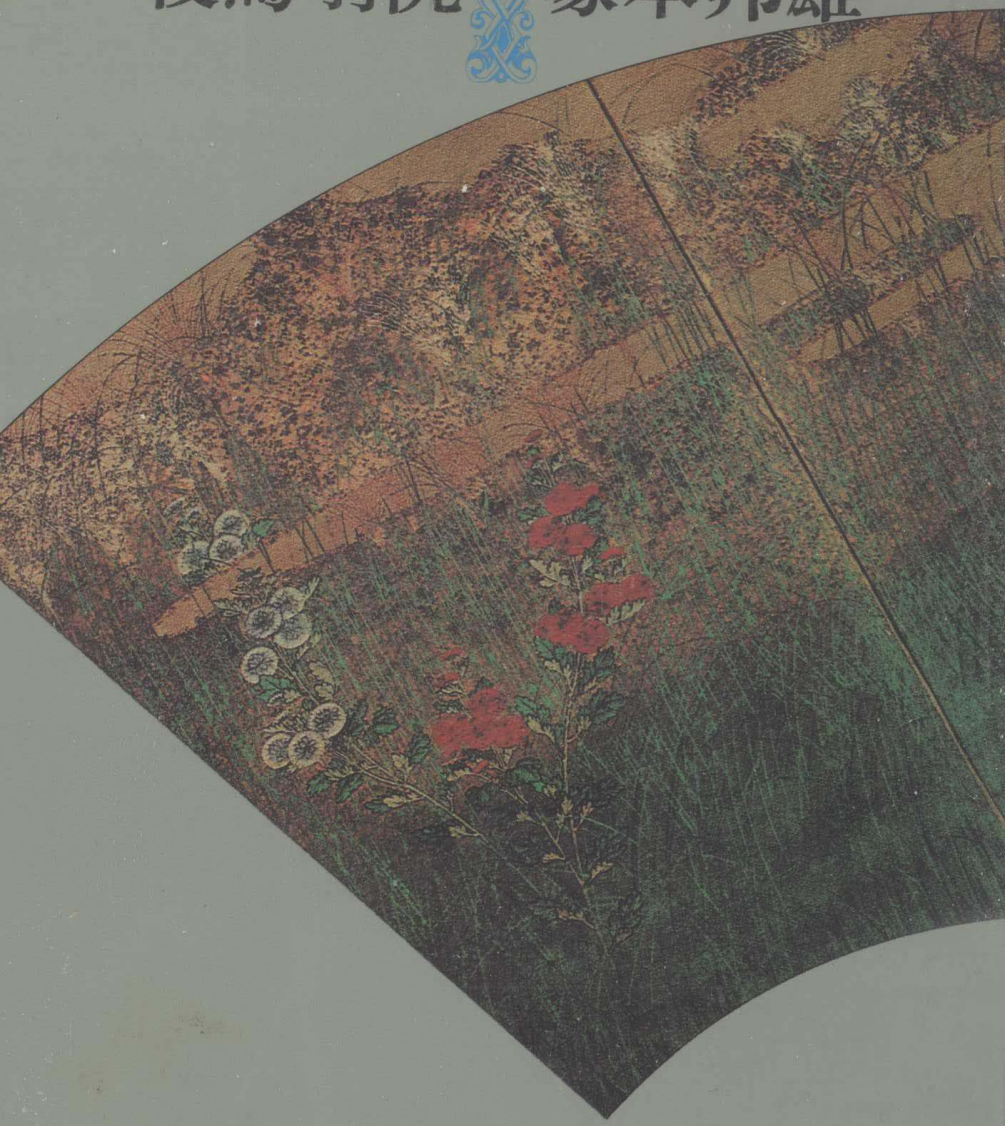
菊帝悲歌

後鳥羽院

塚本邦雄



菊帝悲歌

後鳥羽院

塚本邦雄

集英社

菊帝悲歌—小說後鳥羽院
一九七八年五月一〇日第一刷印刷
一九七八年五月二五日第一刷發行
著者塚本邦雄
發行者堀內末男
發行所株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二丁目五番地一〇號
郵便番號一〇一電話番號東京二三〇局六三
六一番（出版部）六一七一番（販賣部）
整版所株式會社中臺整版
印刷所大文堂印刷株式會社
製本所有限會社石橋製本工場
裝幀者政田岑生
定價八八〇圓

© 1978 Kunio TSUKAMOTO, Printed in Japan
0093-775009-3041
著者との諒解により檢印は廢止いたします
萬一、落丁・亂丁の本がありましたらお取替へいたします

目次

第一章　たれおもひけむ——建久五年1194　七
第二章　すむかひなしや——正治二年1200　四三
第三章　あらしもしろき——承元元年1207　七九
第四章　などあけぼのと——建暦三年1213　一一五
第五章　まつよなければ——承久三年1221　一五一
第六章　なみだそふらむ——嘉祿元年1225　一八七
跋　五黄の菊　二三四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白菊に人のこころぞ知られけるうつろひにけり霜もおきあへず

初度百首

菊帝悲歌

小說後鳥羽院

秋とのみたれおもひけむ春霞かすめる空の暮れかかるほど

正治二年初度百首

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　たれおもひけむ

一月七日は白馬の節會で、朝早くから無理矢理に起され、退屈な儀式をつぶさに見せられた帝は、午後になると疲れ果ててひどく不機嫌になつた。白馬の節會といふのなら、その名の通り紺青の毛並の駿馬を百頭ばかり引き連れて、左、右馬寮のつはものが武德殿の東に勢揃へするがよい。それなら宴の後の腹ごなしに、次から次へと騎り驗してみてやらうと、彼は怒鳴り散らす。大納言の土御門通親が剃りあとの青青した顎をしやくるやうにして、白馬を青馬と申すのはと、知つたかぶりの講釋を始めた。知つてゐる。汝らに今頃聞かされるほど馬鹿ではないと、帝はなほさらつむじを曲げ、通親は苦笑混りに姿を消す。

白馬の節會の故事については、七年も前にとつくりと聞かされた。八歲の正月のことだつ

た。前年三月太政大臣になつたばかりの九條兼實が、重大な祕密でも洩らすやうな聲音で、ねんごろに教へてくれた。そもそも支那の傳說から始まつて、靑が白にすりかはつた顚末にまでこまごまと說き及ぶのだから、途中でもう結構と言ひたくなる。傍では、當時まだ健在だつた祖父の後白河法皇が、この樣子を皮肉な目つきで眺めてゐた。そして幼帝が小さな欠伸を一つ嚙み殺すのをきつかけに、催馬樂の「靑の馬」を朗朗と歌ひ出した。

靑の馬放れば取り繫げ、さ靑の馬放れば取り繫げ、しのい箭矢の、しのい箭矢の、箭せ子が孫なる、さ郞子、または太郞子の子なる、さ郞子。

よく練れた高音の歌聲であつた。閉ぢた扇でぴたつぴたつと掌を打ち、やがてすつくと立上つて簀の子の方へ消えた。兼實はさも忌忌しげに肩をそびやかし、眞顏になつて帝に向き直り、白馬の節會以後の正月行事を次次とかぞへ立て、一つ一つにつまびらかな說明を加へる。十四日が男踏歌、十六日踏歌の節會、十七日は射禮、十八日射遺、賭弓、なほ年によつて變るのが、上子日の若菜、上卯日の卯杖、二月に入る頃は帝も憚らず欠伸を連發した。それを察したかに、また艮の方角から、法皇の歌聲が近づいて來た。「春の初めの歌枕、霞 鶯 歸る

雁、子の日青柳梅櫻……」と、どうやら今様らしく、聲もやはらかになまめいてゐる。よく聞くと丹後の局が華やいだ聲音で唱和してゐる樣子、兼實は露骨に眉を顰め、いかにも耳の汚れとばかりに中啓を翳し、深く叩頭して後退りに退出、御簾の彼方で法皇が笑つてゐた。

その法皇も二年前に六條西洞院の宮に崩じた。櫻の花の咲き滿ちる彌生の十三日、葬送は翌日だつた。太政大臣は一切の饗宴は申すに及ばず、音曲も停止するやう、冷い表情で、帝や、殊に土御門内大臣あたりに聞えるやうに、左右大臣に申し渡してゐた。今樣の一つも歌つて差上げる方が黃泉への旅の慰めにならうものをと、御室の守覺法親王が誰やらに囁かれたとか、まことにその通りと、この伯父君の配慮を、帝もゆかしく思つたことだ。兼實には通じまい。

朝からまぶしいほどの晴天で、清涼殿の東の紅梅が見事に咲き匂つてゐると、女房連の讚嘆する聲がする。覗くと、中宮任子の女房、丹後の姿が見えたので呼びにやつた。紅梅の一枝に歌を添へよと言ふつもりであつたが、彼女が蒼白く畏まつた顏であたふたとやつて來ると、急に興味を喪つた。歌と言へば、彼も近頃、にはかにこれが面白くなつたところだ。祖父法皇はさして奬めはせず、帝王學の一つとして目を通せと、千載は勿論、萬葉及び六代集は、早くから帝の机邊に積み上げてくれたが、身を入れて讀み出したのは十三歲の正月からだつた。讀書

と横笛は十一歳の神無月から學んだ。彼には古歌はともかく、當代の若い歌人のものに心を唆られた。天台座主慈圓から、雅經、有家、あるいは良經の名も聞いてゐる。その左大將良經主催の大歌合が、德大寺殿歌の間で催されたことも、去年の秋から耳に入つてゐた。彼は乳母の兼子を通じて、兼實に歌を見せよと一度だけ命じたが、大臣は例によつてにこりともせず、何しろ愚息が私かに同好の士と語らうて試みた遊びゆゑ、私も知つて知らぬふり、いづれ釋阿の判詞でも完成の曉は、左大將からぢきぢき、非公式に奏覽をと、しきりに逃げるらしい。箸の上げ下しにも有職故實をあげつらふ仁だから、催促しても意地になるだけだらうと、帝は二度と口にしなかつた。第一兼實は歌合に加はつてゐないと聞く。彼はそれも心外であつた。もつとも加はれば左方の筆頭、すなはち主催者とならざるを得まいし、さすればこの歌合は途端に格式張つた、面白みのない儀式になつてしまふ。漢詩文はいさ知らず、兼實の和歌はとんと見られたものではない。それを口にするのは禁忌となつてはゐたが、禁忌であればなほ有名な事實で公然の祕密、この度の歌合を息子が主催するのは當然のことと、歌作るほどの殿上人は皆うなづき合つてゐた。第一良經は四年前二十二歳で、「花月百首」と呼ぶ歌會を催し、天晴秀歌を聚めてゐる。

讀書の暇を見て帝はみづからも歌ひ、懷紙に書きつけてゐた。武官の、殊に二十歳そこそこ

の、名だたる弓馬の名手を召して、流鏑馬や犬追物の話に興ずると、日の昏れるのも、夜の更けるのも忘れる。また、時折われを忘れて袖をまくり上げて、箭はこのやうに引き絞るのかと尋ね、脇息を駒に見立ててこれに跨り、早駈けの鞭はかう打ち下せばよいかと質す。若侍達はその勘のよさに舌を巻き、このやうな尚武の帝は父の話にも、祖父の物語にも聞いたことがないと目を輝かした。彼らをひそかに伺候させるのは通親だが、これも兼實の氣に入らぬところだ。その他法皇讓りで圍碁、雙六も滅法強く、中宮や女房相手に亂碁をする時でも、必ず何かを賭ける。たはむれにせよ、女官の祕藏する檜扇や琶を勝てば召し上げ、それが原因で丹後の局と兼子が目に角立てる一幕もあつた。兼實も十五とは思へぬくらゐの帝の奔放な振舞には閉口し、それなら和歌に心を傾けてもらつた方が無難と思ひ始めてゐた。

和漢の學は文章博士達が形通り進講してゐる。これまた拔群の記憶力で、老體の日野親經などその鋭い質問に戰戰兢兢の體だと聞く。和歌は耆宿釋阿あたりが指南役に向いてゐるのだらうが、彼は六條家に氣を遣ひ、古歌を味讀諳誦するのが何よりの勉強、古今傳授の要諦もここに極まると嘯いて、ひたすら侍講するのを避ける。帝も、四倍以上の年齡の老人ばかりが相手では面白くもあるまい。さりとて女房歌人など言葉敵にして、妙な源氏寫しの歌をひねくつてもらつては、帝王の歌の格が崩れる。良經あたりが歌の友としては最適任であらうと、兼實は

ひとりうなづいた。歌合も六百番に仕立て、四季五十題、戀五十題、申狀、判詞、難陳、一應揃つて淨書もできた樣子、能書の良經自身が、歌千二百首を別に書き寫して、非公式に奏覽に供するがよからう。それも帝が見たがつてゐる時、少少じらせておいてから何氣なく差出すのが一番效果的だ。あまり放つておくと、たとへば通親あたりが、六條家の季經か顯昭を通じて詠草を取り寄せ、手柄顏に奉らぬとも限るまい。殊に顯昭は激越な陳狀で釋阿俊成の判詞の弱點を衝きまくり、また寂蓮とも丁丁發止の舌戰を繰返したとか、その昂奮も冷めやらぬこととて、あの野心家の通親にどんな資料を渡すか、これは十分に警戒の要があらう。兼實は事事に反りの合はぬ彼のぬるつとした面構へと、切れ長の三白眼を思ひ浮べると嘔吐を催す。同じ久安五年生れの四十六といふのも腐れ緣めいて憤ろしい。その通親の歌の師匠こそ季經であつた。九條家が釋阿や定家の御子左家を推輓しようとするのを十分計算に入れて、彼は六條家を引立てようと躍起になつてゐる。その對抗意識はかたはら痛いが、單にこの件のみならず、破廉恥な野心家通親の擧動は油斷も隙も無い。かつて平家一門が華やかに登場した時は、どう奔走したのか淸盛の姪をまんまと娶つて人人を啞然とさせた。古妻を逐ひ出してのことゆゑなほさらだつた。宣陽院の院司にまで成り上れたのはそのせゐである。ところが平氏が西へ敗走するのを見送ると、二度目の妻も早早に離別した。日ならず彼は後白河法皇の身邊に出沒し始

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com